



多様性連帯のこのころ

と庄制の象徴としてな
ぎ倒され、
民衆が拍手
喝采を送る
姿を見て、
「レーニン
はもう終わ
ったな」と
痛感した。
ましてや、
共産主義者

ともないレーニンばかり読むようになつた。いちおう超低賃金だったけど、専従学生指導部のはしくれた。「これもプロの仕事だ。がんばるしかないな」と自分に言い聞かせて乗り切った。

その後、八〇年代後期に戦旗・共産同は天皇式典やサミットなどでロケット弾を放つなど武装闘争を激化させ、拳句の果てに三里塚での同時

多発ゲリラの首謀者として、僕は八八年末に逮捕・投獄されてしまった。獄中四年半。その間に組織の路線は一八〇度の転換を遂げた。遅れてきた戦旗版六全協。出所したら僕は、山村工作隊上がりの浦島太郎だ。しかも、この転換の思想的支柱は、なんと廣松哲学だったのだ。これには驚いた。

獄中で僕は、レーニン像が独裁

僕たちがブント系政治・思想集団から、持続可能な社会をテーマとしたNPO（法人格としては一般社団法人）「アクティオ」に生まれ変わってから十年近くの歳月が経過した。でも、現在の僕たちの姿は、「ブント」を名乗っていた頃の思想的変遷の行き着いた先だと思っている。そ

のきっかけとなつたのが廣松渉との出会いだった。

パラダイム・チェンジによる組織の大転換

一九八〇年、僕は学生組織の指導部だった。実は、その頃かなり廣松

哲学に入れ込んでいて、当時の学生組織の理論機関誌だった『若きボリシェビキ』に、廣松理論の引き写しのような論文を書いてしまった。そしたら、組織のドン荒岱介から、「お前、これじゃあまるで情況派じゃないか」とこつぴどく叱られた記憶がある。しかたなく面白くもなん

である以前に経営者であつた荒岱介が、そう思わないはずがない。案の定、左翼業界という極めてニツチなマーケットを相手に、持ち前の動物的嗅覚を駆使して大きく組織の舵を切った。それを可能とする、抜群の経営手腕と独裁的権力を、彼は持っていた。反論のある人間は黙るか、組織を去るほかなかった。

およそマルクス主義とは無縁な世界に生きていた（と僕の推察する）荒岱介は、にもかかわらず生粋のマルクス主義者・廣松渉の哲学を武器に「パラダイム・チェンジ」をかけた武装闘争とレーニン主義を葬り、「ほんとうのマルクス主義」を探索する思想集団として、組織の延命を図つたのだ。企業におけるCI戦略において、その伝統的なアイデンティティへの回帰・復興が企業変革の梃子となるように、この原点回帰のパラダイム・チェンジを梃子に、彼

旧戦旗・共産同の軌跡

「情況」二〇一七年夏号

ある新左翼党派の 数奇な運命

水 沢 努

MIZUSAWA Tsutomu

一般社団法人アクティオ代表理事、埼玉県越生町議会議員、一九七五年立教大学入学

は組織の全面改造を実現していった。このまま武闘路線を突っ走ったら行き詰るしかないと考えていた僕は、組織の大転換を獄中で歓迎していた。実のところ僕は、投獄以前から共産主義には辟易していたのだ。男の意地とか義理人情とか、およそマルクス主義とは無縁な美学に自分のアイデンティティを置いていた。アイデンティティの置き場所はともあれ、マルクスの教えを冒瀆していたという点においては、荒と同じ穴のムジナだった。かといって、マルクス主義の放棄は構成員のアイデンティティ喪失による組織崩壊につながるのと思いから、そこところは守るしかない、僕は腹をくくっていた。おそらく今、共産党の中核もまた、似たような考えから「共産主義」の建前を捨てきれないのだろう。その点では、荒岱介は僕以上にラジカルで正直だったといえる。な

不足は必然化される」というマルサスの人口論をベースに、「人口増加や環境汚染などの現在の傾向が続けば、一〇〇年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らした書だ。組織のエコロジストへの転換は、廣松哲学にのっとり、唯物史観の延長線上に生態史観を構想した結果ではなかった。それは唯物史観の放棄の結果だった。

以降、組織は廣松哲学一本やりから離れ、廣松の旧友であり義兄弟の加藤尚武の『環境倫理学のすすめ』が必読文献とされた。加藤尚武は多くの一次ブント出身者同様、反共主義への転向組だった。組織は急旋回し、「パラダイム・チェンジ」から「可能な中で最善の選択」を追求する、加藤流「エシックス」へと思想的に転回していった。マルクス主義からの離脱と革命の放棄は急ピッチで進められた。カール・シュミッ

にしる、その後、一直線にマルクス主義（共産主義）をおおつぱらに放棄するところまで突っ走るのだから。僕たちの反共主義への出発点は、実はこの廣松哲学を介したマルクス主義（共産主義）の原点回帰への呼びかけだったのだ。このアイロニーの罫は荒が仕掛けたもののなか、荒本人も知らずにはまった罫だったのか、はたまた廣松の掌でさまよえる物象化のキントン雲だったのか、今となつては知るよしもない。

唯物史観の放棄とエコロジストへの変身

廣松思想への転換当初は、環境問題についても、あくまでもマルクス主義の観点から、資本主義の矛盾として論じていた。当時は、廣松の『生態史観と唯物史観』における次のような観点を共有していた。

トの説くように、「決断力」が政治家に求められる最大の資質だとするならば、荒岱介はブント系では傑出した政治家だった。

荒はこうしたマルクス主義および廣松流マルクス理解からの決別を、後に自著『廣松渉理解』で次のように触れている。

「廣松は若くしてマルクスの魂に学び、終生その呪縛のもとに生きようとした」「マルクス・エンゲルスは『歴史を觀するにあたり、人間的主体と自然的環境との生態系的な相互規定態を表象していたことはたしかである』という具合に」「なんとしても唯物史観を生態史観と言い換えたいのだ。しかし：言い換えはできないと私は思う」。

荒岱介は強烈なメジャー志向、一流志向の人物だった。廣松渉という日本を代表する哲学者との出会いは、自らと自らの率いる組織のステ

「この『人間生態学（エコロジー）的な危機』は決して単なる生物学的な法則によつて自然必然的に招来されたものではなく、産業文明の編制という歴史的・社会的・文化的な営為によつてもたらされるものにほかならない。それゆえ、当の危機は、産業文明の編制の在り方をしかるべく変革しなければ、超克することも不可能ではない。そして、われわれの信ずるところ、産業編制の在り方をしかるべく変化することは現に可能であり、それは亦当為でもある」

だが、こうした立場は、ほどなく捨てられた。マルクスではなく、その宿敵マルサスのほうに軍配はあげられたのだ。荒はローマクラブの『成長の限界』を組織の指定文献として、学習会を組織した。この文献は、いうまでもなく、「人口は幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しないので、食料

イタスを大きく押し上げるものだった。それに引きかえ、廣松のマルクスへのこだわりはあまりにも矮小なものに見えたに違いない。環境保護運動という大海に乗り出すには、もつとメジャーで金ピカな船が必要だったのだ。彼は環境保護に限らず、社会理論全般において、左翼の貧乏臭いマイナー性からの脱却を強く欲していた。最新型ポルシェ911を購入したのもこの時期だった。

大転換のプロセスは、決して穏やかで民主的なものとはいえず、多少の組織内の軋みを生み出しはしたが、すでに共産主義に嫌気がさしていた僕には、歓迎すべき流れだった。大多数のメンバーがこの変化を素直に受け入れたところを見ると、実はみな似たようなことを考えていたのかもしれない。

十年にわたり牽引していったのだ。文字通りの「荒技」である。

そんな中で、やる気の失せていた僕は、一九九九年、妻の住む沖縄に移住し、社会人としての自立にいきなしていった。獄中で学んだ英語で塾業界にもぐりこみ、独立して塾経営を開始。塾は順調に立ち上がっていった。ところが、移住して数年後、久しぶりに上京して、組織の合宿で荒と顔を合わせると、悪魔のささやきが待っていた。

「俺はもう引退するから後はお前に頼む」。なんと言う言い草だ。身勝手にもほどがある。

さすがにいろいろと悩んだが、僕は引き受けることにした。塾経営はうまくいっていたが、これで人生を終えるのも何だかな、と感じはじめていた。最後には故郷に帰って町議にでもなるか、という漠然とした気持ちも芽生えていた。親不孝の限り



赤ヘル軍団の時代（83年の成田バイパス供用阻止闘争）

環境系自己啓発セミナー路線とその終焉

マルクス主義を統合原理とする組織における、マルクス主義の放棄は、「神の死」を意味する。以降、荒は様々なジャンルの思想や理論を勉強して、それを自己流に解釈し、組織の思想としていった。さらに、「知のクロスオーバー」と称して、学者や文化人、ミュージシャンなど、ジャンルを超えた人物との交流を深め、彼らを講師に呼んだワークショップ運動を推し進める

ことになる。そうした新しい思想や文化との出会いが、「神」を喪失したメンバーの心の隙間を埋めていった。様々なイベントが意匠を凝らして開催された。料理対決や模型飛行機作り、風揚げや総合格闘技大会などが、荒の講演と組み合わせて行われた。これが当時の若者の「自分探しのトレンドとマッチし、組織は拡大していった。

荒は機を見るに敏であり、マーケティングと人心掌握の力は、はつきりいつて凄かった。これが、ブント諸派を敵に回して、サバイバルを実現してきた力なのだと実感した。組織はこの時期、自らを「知的共同体」と位置づけ、一種の環境系自己啓発セミナー団体へと変貌していったのだ。ただし、これがどう社会変革とつながるか脈絡づけには、かなりムリがあった。ムリを承知で荒は、マルクスを捨てた組織をその後

ブントは死んで実を残す

荒岱介は引退直前、それまでの自由主義思想や現代哲学などへの傾倒の後、プラグマティズム思想を強く推すようになっていた。特にイチ推しは、荒同様の極左からの転向者リチャード・ローティだった。これまでの荒自身の思想的変遷や、時宜に応じた（悪く言うとう恣意的な）組織運営を見れば、そもそも彼の思想的本質はプラグマティズム以外の何ものでもないという事は明らかだった。高らかに、そして理論的根拠をもつて、自らの立ち位置を鮮明にしたのである。

実は、僕も根っからのプラグマティストだったので、ローティの主張には「なるほど」と合点がいった。ローティは個人の信念や思想、信条を趣味（決して趣味を低める意味ではない。趣味には命をかけるに値する

ものがいくらでもある」と同じ次元で扱うべきだとし、それは公共的なものとは共約不可能な私的レベルの世界だとした。また言説で世界を変えようとする左翼を、それが具体的な社会貢献につながらない限り無力な自己満足だとし、「文化左翼」と揶揄した。僕は、そうしたローティの徹底した相対主義と醒めたりアリスムに共感した。それは当時、関心を

- ①共同主観性と構造変動
 - ②社会主義の根本理念
 - ③読み直されるマルクスドイツ・イデオロギーと共産党宣言
 - ④物象化論と経済学批判
 - ⑤哲学体系への新視軸
 - ⑥対論・知のアクチュアリテート
- 情況出版

もって読んでいたギデンズやベックなどの社会学系の考え方にも通じるものだった。言説の中身は自己満足の世界に属し、社会との接点はその機能なのだ。

リーダーの私的な言説の世界に人々を囲い込む自己啓発セミナー路線は、その内容がどうあれ、実はローティの批判する文化左翼と等価のものだ。荒の最後にたどり着いた所はそうしたアイロニーだった。廣松の物象化論も、共産主義という信念の物象化を解き明かせば、一瞬にしてアイロニーの体系となる。そして、アイロニーを体験したところからリベラル・アイロニストは始まる、というのがローティだ。現在の僕たちは、そうした自立したりベラル・アイロニストへと旅立っていくプロセスなのだ。

アクティオは、数年間、社会運動の交流誌を発行してきたが、今は停

止し、残った資金で社会貢献活動への助成を行っている。メンバーが否かにかかわらず、これまで様々な団体や個人の活動に資金援助を行ってきた。いずれ資金の枯渇するときにやってくるが、そのとき法人は解散する。

かつて第一次ブントの島成郎は、「虎は死んで皮を残す。ブントは死んで名を残す」と言ったが、僕は、たとえささやかであっても、「ブントは死んで実を残す」ことを願っている。島先輩をはじめとする先達のように。